

豊庄だより



第 599 号 2020 年 1 月 27 日

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

『熱源』を読むことをお勧めしたい」と、西日本新聞のコラム「春秋」(2020年1月18日付朝刊)に、書かれていました。『熱源』は第162回直木賞に選ばれた話題の小説です。私はまだこの本は読んでいませんが、誰が賞を取るかを予想する同紙の記事(第162回芥川賞、直木賞 展望 記者座談会)でその名前は知っていました。予想では、5つの候補作の中でトップを走る作品ではありませんでした(8人の記者による対談だったのですが、そのうち3人が『熱源』について発言し、強く推したのは1人だけでした)。

記事には、次のような「あらすじ」が載っていました。

直木賞候補作とあらすじ▽川越宗一『熱源』・・・「故郷・樺太を追われたアイヌのヤヨマネクフと、ロシアに母語を奪われたポーランド人のブロニスワフ・ピウスツキ。自らの存在意義をかけ、彼らは強国が振りかざす文明にあらがう。」

これだけではちょっと内容はわかりませんが、著者が遠く離れたアイヌとポーランドをどのように結びつけて話を展開しているのに興味を持ちました。アイヌ民族は、北海道や樺太(サハリン)で独自の文化を形成し、それを変えたのは明治政府でした。アイヌ民族は住み慣れた故郷を追われ、狩猟や漁業などの生業を奪われました。『熱源』の舞台は樺太で、この地は日本とロシアが領土争いを繰り広げたところでした。一方、ポーランドはロシアに併合されるという歴史を持ちます。ヤヨマネクフとブロニスワフ・ピウスツキの二人が物語の中で、強国にいかにか闘ったか。未読なので想像ですが、きっと面白い小説でしょう。

この『熱源』を冒頭で紹介したコラム「春秋」は、推しています(受賞が決まってからのことですが)。そして、この「春秋」が「読むことをお勧めしたい」相手は、読者一般でなく、ある政治家に対してでした。この人は、「2千年の長きにわたって、一つの民族、一つの王朝が続いている国はここしかない」と地元(直方市)の国政報告会で発言したことも書かれていました。

失言をこれまでも連発してきた方で、またかと思いますが、浅はかと言うか、歴史認識のなさにただただあきれざるばかりです。

『熱源』のことを考えていると、領土問題のことが書かれた進藤栄一さんの『分割された領土』(岩波現代文庫)のことを思い出しました。この本には「もう一つの戦後史」という副題が付けられています。読んだのは10数年前のことで久しぶりにページをめくり読み返しました。

日本には戦後、「分割された領土」があり、一つは南千島、もう一つが琉球です。琉球は2段階に分けて復帰しましたが、南千島は依然として戻ってきていません。私はここで北方領土返還問題を述べようとしているわけではありません。なぜこんなことが起こったのか。そこには戦後アメリカによる占領政策と米ソの対立という複雑な背景にあります。著者の進藤さんがアメリカ国立公文書館で発掘した1枚の電文をもとに、この本を書いています。それは「天皇メッセージ」と言われるもので、「分割された領土」の原点はここにあると述べられています。詳しい内容はここで書くのに至るまで難しく、興味ある方はぜひ本書をお読みください。

『分割された領土』が書かれたのは1979年(雑誌「世界」の1月号)のことです。40年前の論文ですが、今読み返してみても、沖縄の問題と北方領土の問題がリンクしていることがわかります。

